

弥陀佛を信ずる故に五逆罪の咎に依りて必ず無間大城に墮つべきなり」と、また○禪天魔とは、行敏訴状御会通に「禪宗は天魔波旬（殺者パービーマン。人の命や善眼を断つ悪魔）の説と云云、此又日蓮が私の言に非らず、彼の宗の人人の云はく教外別伝と云云。佛の遺言に云はく、我が経の外に正法ありといはゞ天魔の説なり云云。教外別伝の言、豈に此の科おきてを脱せんや」と云はく。○真言亡国とは「證文何なる經論に出づる也」答「法華經誹謗正法向脊の故なり」問ふ「亡国の證文之無くば云何に信ずべきや」答ふ「謗法の段は勿論なるが、若し謗法ならば亡国、墮地獄疑いなし、凡そ謗法とは謗佛謗僧なり、三宝一体なる故なり、これ涅槃經の文なり、爰を以て法華經には則断一切世間佛種と説く。これを一闡えんと名づく、涅槃經の一を十と十一とを委細に見るべきなり」と云い、釈迦、大日二佛の一世にあるべきことなし等の真言七重の難を説き、更に大論の九に云はく、十方恆河沙の三千大千世界を名づけて一佛世界と為す、是の中にさらに余佛なく、実には一の釈迦牟尼佛なり。次に○律国賊とは、下山御消息に「今の律宗の法師原はらは世間の人人には、持戒実語の者也。其の故は、彼らが本文とする四分律十誦律等の文は大小乗の中には一向小乗、小乗の中にも最下の小律也。……佛の記し給ふ阿羅漢に似たる闡提是也。と云い、是れ即ち律宗の徒が自ら国宝を以て任ずるに對して却て之を国賊の流なりと評したるなり」と仰せられ記すところで大方四箇の格言の本意と釈尊に歸すべきこと、法華經に歸依の正道を示されたものと理解するものです。

### (九) 南部弥六郎殿について

遠野南部家は八戸から移って以来、盛岡に居住し現在の内丸北ホテルの位置にお屋敷を賜つていた。

ある歳天下の諸侯が將軍家のお伴をして宮中に参内することになったが生憎盛岡南部家の当主は病いを得ていて供奉できなかつた。替りに遠野南部弥六郎殿が名代で参内した。時は秋で天候不順な歳

であったであろう。時ならぬ鹿の鳴く声が貴きあたりのお耳に達した。宮中に於ては鳥一羽死んでいても不吉だと陰陽師に掛を立てさせる程であるから、この時は天子様始め堂上高家の方々は大層不安をおぼえられた。

南部弥六郎殿はお上のお心を安んずるために一首を献じた。

「秋の霧 春立つかすみと まごうれば

時を忘れて 鹿の鳴くらん」と

これを聞こし召した主上は平生関東武士は教養のないものとの先入観があられたものだからいたく賞でられ

「そも何人であるか」との下問があった

答えて云く

清和天皇 経基王が八代の後裔甲斐の源氏光行が子孫にしてと家系を言上した。

氏素姓の判らぬ者の多い中にわけても殊勝な武者よとおほめをいただいた。

盛岡の南部公も名代弥六郎殿のことを殊の外感ぜられ以来遠野南部家は代々弥六郎を以て名乗るよう仰出された。

その時の主上からの御下賜品が京都の疑宝珠現在の上ノ橋、中ノ橋に飾られていたものだと伝えられている。

田口信之記

(十) 日昌上人の遺稿「くさぐさ」

〔廿四世日昌上人病床にて毎日少しずつ書きためたもの。〕

先住職日昌上人は、私達檀信徒にとっては忘れ得ない柔かい笑顔とその眼差しで気軽に呼びとめら

